

〔〈身〉の医療研究会 第9回研究交流会 企画趣旨〕 pp. 1-5



〈身〉の医療の「核」と「縁」

原点への回帰

菅村 玄二

(関西大学文学部)

はじめに

尻込みしながらも、〈身〉の医療研究会の「第9回研究交流会」の世話役（いわゆる年次大会の大会長の役目）を拝命した。尻込みしたのは、まずは私自身が医療従事者でもなければ、心理療法家でもないということがある。また本研究会には2014年の「第1回研究交流会」で登壇した以降は、少しだけ顔を出した程度で実質的にはほとんどノータッチだったことが大きい。学術大会の開催にあたっては大会テーマが求められるが、こうした背景からも、どのようなテーマを企画するか足踏みしてしまった。結果的に、本会合は思いのほか多くの方からの好評を博したが、今回、どのようにテーマを設定し、どのような趣旨で企画したかについて、本会合の記録を兼ねて、その背景と経緯を記しておきたい。

研究交流会のテーマとコンセプト

一般的に、大会テーマは、講演者やシンポジストを誰に依頼するかという問題と連動する。つまり、大会テーマを決めると、そのテーマに応じた登壇者を招聘しなければならない。逆に、登壇者を決めると、登壇者の専門性に応じたテーマ設定が必要となる。実際は、それらの両方をすり合わせながら調整していく作業となるが、テ

マこそ会合の肝となるところであり、また最も頭を抱えるところである。しかし、今回は、私自身が何かを主導するというよりも、本研究会の役員のお力を借りることで何とか形にできるかもしれないと考えてお引き受けする覚悟を決めたという経緯があり、引き受けた時点で、企画概要をある程度は思い描いていた。

交流の場

まず1つ目は、「研究交流会」の本義に立ち戻り、研究に関する「交流」をコンセプトとすることである。すでに本会の役員として錚々たる面々が揃っていたため、このメンバーで意見交換するだけでも、交流会としては十分に手応えのあるものになると思われた。加えて、そこに特別講演者として外部の専門家をお呼びし、また一般からも参加者を募ることで、いっそう活発で多様な交流ができる場となることを期待した。研究会の役員を中心としながらも、外部の専門家と一般参加者の視点を加えることは、後述する「メタ・シンポジウム」のコンセプトにもつながっている。

〈身〉の再考

「交流」を目的とするのであれば、限定された特定のテーマを設定する必要はない。むしろこのメンバーが集結することとなった〈身〉こそ、テーマとしてふさわしいと思い至った。すなわち、〈身〉の医療の〈身〉とは

何かを改めて問い直すことを2つ目のポイントとした。〈身〉とは、生物・精神・自然・社会・霊的なレベルにまたがるある種の全体性であり(深尾, 2015; 市川, 1984; 菅村, 2016)、さらには心身医学上の目標設定として、そこに実存(池見, 2009)や倫理(深尾他, 2021)を加える議論もあるように、多次元のもしくは重層的な概念であることは間違いない。では、その中核的なテーマとはいったい何か。逆に、その周辺的なテーマはどこまで拡がり、そこにはどのようなトピックやクエスチョンが含まれるのか。

こうした問題について、本会の役員全員に話題提供の可否を打診した。引き受けていただいた方には、「それぞれの先生が考える〈身〉の中心テーマ、もしくは〈身〉に含まれるか含まれないのかもさっぱりわからないような周辺テーマのいずれかを5~10分でお話いただき、その後、演者同士、また他の参加者の方も含めて、ざっくばらんに意見交換」していただきたいと改めて依頼した。まったくもって、オーガナイズされたセッションとは言い難いテーマ設定と依頼内容である。

混沌からの秩序

〈身〉という概念が生物、精神、自然、社会、実存、倫理、そして霊性までも包摂するとすれば、このテーマ設定はあまりに広範である。しかも、その広大なテーマの範囲で、学術的・実践的背景の異なる専門家が好きなように話してもらえば、混沌を極めるのではないかという心配がまったくなかったわけでもない。俗語でいういわゆる「カオス状態」にならないかという懸念である。

しかし、学術的に「カオス」を研究する複雑系科学では、さまざまな複雑な活動が、最も調和的に働くのは、秩序(order)と混沌(chaos)の境目、すなわち「カオスの縁^{ふち}」であると考えられている(Kauffman, 1995)。静的で安定的な平衡状態よりも、そこから遠くはなれたダイナミックな状態でこそ秩序が生まれるのであって(Prigogine, 1998)、秩序は混沌から創発する(Prigogine & Stengers, 1984)。私の恩師であるMichael J. Mahoneyは、認知行動療法を世界で初めて体系化したことで知られるが、身体性の問題にいち早く取り組み、心理療法の本質は「精神障害」(mental disorder)を“disorder”(無秩序状態)からカオスへと導くプロセスであると考え、それを“edging process”と呼んでいた(Mahoney, 2003; Mahoney & Moes, 1997; 菅村, 2007)。

今回、〈身〉の中心的テーマだけでなく、周辺的なテーマも含むものと設定した理由の1つがここにあり、〈身〉

であるのか〈身〉ではないのかというその境目を行きつ戻りつするという“edging process”を通じて、〈身〉にまつわる“cutting edge”の示唆なり洞察なりの一端でも垣間見られれば大成功ではないかと考えた。

原点回帰

行ったり来たり近づいたり離れたりしながら〈身〉を考えようとすることは、本質的にダイナミックなプロセスであり、そのダイナミズムを促す契機として期待したのが「交流」であった。その意味で、〈身〉の医療研究会で〈身〉について問うことと、研究交流会を「研究交流会」として開催することは、相即不離の関係にあり、これらを車の両輪として、「原点への回帰」を目指す会合と位置づけた。

研究交流会の形式とプログラム

開催日時と形式

2024年3月17日、〈身〉の医療研究会の第9回研究交流会をオンライン開催した。Zoomミーティングを使って、9時から16時までリアルタイムで行った。その後、3月29日から5月6日まで、Peatix上でYouTubeの限定公開機能を使ってオンデマンド配信をした。対面形式は取らず、ハイブリッドでもなく、オンラインのみの開催形式となったが、ここにも葛藤があった。

コロナ禍以降、規模の大小を問わず、オンラインで会合する機会が急増した。この交流会を開催した2023年度は、いわゆるコロナ禍が明けた「アフターコロナ」の認識が広まった年であった。年度が開始して間もない5月5日、世界保健機構はCOVID-19を「定着した継続中の健康問題」と位置づけ、2020年1月30日から続いた「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」に該当しないという声明を発表した(World Health Organization, 2023)。それまでの数年間の学会活動といえば、ほとんどオンライン開催に限られて、本研究会でもオンラインで研究交流会が開催されてきたが、2023年度は他学会でもオンラインと対面のハイブリッド開催が多く、本交流会の開催形式をどうするかも悩みどころの一つであった。

当然、〈身〉を掲げる研究会で「交流」を目指す以上、その場に身を置き、面と向かうことのできる対面形式に戻す強い誘惑に駆られた。しかし、今回は開催日に登壇可能な役員がいなければ、そもそも会が成立しないコン

〈身〉の医療研究会 第9回研究交流会 プログラム

セッション	登壇者	所属	題目
開会挨拶 (9:00～9:05)	菅村 玄二	関西大学文学部	身の医療の「核」と「縁」：原点への回帰
基調講演 (9:05～9:55)	中村 嘉男	ユタ大学医学部	心と身体：エンアクティブ認知科学からの展望
メタ・シンポジウム			
午前 第1部 (10:00～11:00)	深尾 篤嗣	茨木市保健医療センター	〈身〉からみた身体症状の意味：三段階の気づき
	山本 和美	医療法人京都翔会西京都病院心療内科 関西医科大学心療内科学講座	〈身〉との関係性：マインドフルネスの視点から
	奥見 裕邦	医方会奥見診療所 大阪総合医学教育研究会附属 親と子の診療所	腹診で考える、五臓論の心身相関
午前 第2部 (11:05～12:05)	渡邊 勝之	いのちアカデミー合同会社【LFC】	病気の治療&予防から個&公の健康へ： 健幸美楽®メソッド
	藤井 康子	平井クリニック	ジョセフ・ワイスの制御-克服理論： 精神分析を用いた文芸評論に与えるインパクト
	久保 隆司	日本ソマティック心理学協会	〈身〉=SOMA BASEDな学問的枠組みに関する私観
午後 第1部 (13:00～14:15)	池見 陽	関西大学人間健康学部	フォーカシングの原点とこれから
	町田 英世	まちだクリニック	慢性疼痛専門が発達障害専門になってしまった！？ 身に触れるケアの可能性：身の医療の実践としてのタッチケア・ セルフタッチング&エサレン®ボディワークの視点から
	中川 れい子	NPO法人タッチケア支援センター	なんだか怪しいOリングテストとその周辺
午後 第2部 (14:20～15:35)	西田 慎二	にしだクリニック	有機体-環境相互作用としての一人称のからだ
	村川 治彦	関西大学人間健康学部	アトピー治療の脱ステロイドと脱保湿における身心魂の統合
	鎌田 穂	身心魂の統合と癒しの空間スプリア	“自分自身”と“心身一如”を手がかりに、人の在り方を問う？ 操体法を介して見えてきたこと
	北村 翰男	奈良漢方治療研究所	非思惟の実践の場としての身体
ディスカッション (15:40～16:00)	菅村 玄二	関西大学文学部	
	参加者全員	—	—

Note. 題目はすべて当日のものとした。基調講演の中村氏はメタ・シンポジウムにも討論者として参加した。

セプトであり、実際、日時調整の結果としても、対面よりもオンラインのほうがより多くの参加が見込まれたため、後ろ髪を引かれながらも、オンライン開催とした。当日のプログラムは上の表の通りである。

基調講演

〈身〉の医療というテーマの研究交流会ということで、基調講演は迷わず中村嘉男氏（University of Utah）に依頼した。中村氏とは、2018年9月に京都の妙心寺で開催された、Mind & Life Institute 主催の「禅とマインドフルネスを越えて：文化、歴史、科学から見たContemplative Practice とは？」というイベントで、ともに組織委員を務めさせていただいた際に、光栄にも知り合うことができた。それ以来、コロナ禍で流れたものの、身体性に関する国際イベントを共同企画したり、最新の知見も随時教えていただいたりして、交流を深めてきた。今回も真っ先に打診してご快諾いただけたことも、本交流会の開催を引き受ける大きな後押しとなった。

中村氏は、現在、ユタ大学医学部の麻酔学科・疼痛医学部門のご所属で、同大学の「疼痛研究センター」や「心身相関探究センター」にて、心理学の観点から心身問

題について長年研究されてきた。近年は「非二元的な意識性」（nondual awareness）の尺度を開発して研究を進められている（Hanley, Nakamura, & Garland, 2018）。今回は、事前に「エンアクティブ認知科学から見た〈身〉と〈心〉」という題目をいただいていたが、当日は少し変えて「心と身体：エンアクティブ認知科学からの展望（Mind and Body: A View from Enactive Cognitive Science）」というテーマで50分ほどお話しいただいた。〈身〉の医療に最先端の身体性認知科学がもたらす示唆に留まらず、日本の〈身〉の概念が今日の認知科学にもたらす示唆まで見据えた講演であった。

メタ・シンポジウム

シンポジウムの原義 日本では、と一般化してよいかはわからないが、少なくとも私の周りでは、「シンポジウムの後は飲み会」というパターンが定式化されている。公的なシンポジウムよりも、その後の私的な飲み会のほうが、肚を割った話し合いができ、議論が深まり、示唆が得られることが実際に多い。コロナ禍によって、そのような「文化」が薄れてしまったことは残念であり、本交流会もオンライン開催としたことで、こうした機会を

もてなかったこともまた残念である。

シンポジウムといえば、思い出すエピソードがある。アメリカに留学していたとき、中国人留学生に何かのパーティに誘われたことがあった。その日はシンポジウムに登壇する予定が入っていたため、それを理由にお断りしたのだが、“symposium”という単語を知らなかったらしく、その場で「ちょっと待って」と英中辞書でパッと調べて、「それに行くくらいだったら、こっちのパーティに来てよ」と言われた。きょとんとして、その辞書を見たところ、漢字で「酒宴」とだけ書かれていた。いやいやいや、その辞書おかしくないか、と意味を説明したわけであるが、後日、よくよく調べると、この当時の辞書はちゃんと正しい意味を載せていたことがわかった。

もちろん、今日の英中辞書では「座談会」などの意味も書かれてあるが、元々、シンポジウムという言葉は、ラテン語の“symposium”、ギリシア語の“symposion”に由来し、「共に」(syn-)と「飲む」(po-)を合わせた単語であった(Harper, 2025)。まさに「酒宴」であり、「飲み会」である。ギリシア人は食事中に酒を飲まなかったため、夕食後にワインを飲みながら知的な会話をしたり、舞踊や音楽を見聞きする娯楽がシンポジウムと呼ばれる楽しみであった(Whitney, 1904)。つまり、日本ではこのころの「シンポジウムの後は飲み会」の「シンポジウム」は本来のシンポジウム(酒宴)ではなく、その後の「飲み会」こそが本来のシンポジウムのあり方であったと言える。

そういうわけで、本交流会でも飲みながら発表と討論を行う形式とした、と書ければおもしろかったが、残念ながら、それは実現できなかった。古代ギリシアでは、水で薄めたワインが一般的で(Whitney, 1904)、アルコール度数がどれくらいだったかは定かでないが、現代のイタリアで開催された学会に参加したときは、会場には常時、ワインなどの酒類のほか、茶やコーヒー、ジュースなどのソフトドリンク、軽食も置かれ、音楽も流れていて、まさに「シンポジウム」の様相を呈していた。本研究会も対面開催なら、そのような企画を実現したかったところである。今回はオンライン開催であったが、もし自宅などから飲みながら参加されていた人がいたなら、企画者としては我が意を得たりといったところである。ちなみに、私自身は複数の機器の操作に追われ、飲んでいる余裕などなかったが、気持ちとしては、娯楽の交流会のようなシンポジウムとなることを望んでいた。

メタ・シンポジウムの含意 シンポジウムのテーマは、「身の核心と周辺を探る」とした。休憩を挟みつつ、午前

と午後で2部ずつ計4つのセッションからなるように構成したが、題目や専門分野によるグループ分けはせず、登壇者が参加可能な時間帯であることを優先しておよそランダムに振り分けた。専門分野は近いほうが議論は収束しやすく深まりやすくなる反面、予定調和のように終わると、おもしろみに欠ける。今回は、先に述べたように交流のカオス性を高める意図があったために、議論が拡散してもよいように専門分野で括ることはあえてしなかった。

通常のシンポジウムは、シンポジストとして、司会、話題提供者、指定討論者がいて、発表後に登壇者間でディスカッションされる。場合によっては聴衆からの質疑応答で議論を深められることもある。今回は「メタ・シンポジウム」という言葉を用いた。これは私のオリジナルではなく、私の恩師であり、本会の顧問でもあった故・春木豊氏の造語である。ラウンドテーブル(円卓)を囲って、シンポジストがプレゼンテーションをしてディスカッションをするという形に加えて、その周りをぐるっと聴衆のイスでさらに囲む形にすることで、参加者がメタ的な視点からシンポジウムに積極的に関わる役割を担うという形式である。その意味で、メタ・シンポジウムとは、登壇者だけでなく参加者もシンポジストになることが期待されるものであるが、今回は参加を検討している人が及び腰になることを心配して、この点は強調しなかった。

代わりに強調したのは、「メタ」(meta-)が「間」や「超越」の意味をもつ点である。セッション内の演者間はもちろん、セッションを超えて演者同士やフロア間の交流を意図すると同時に、〈身〉を俯瞰的に捉えるという企画の趣旨をこの用語に込めた。一人当たりの発表時間はかなり短めに設定したが、あえて「言葉足らず」にすることで残る余韻も「間」であり、メタ・シンポジウムの趣旨のひとつとした。当日は、参加者からの発言(メタ発言)も少ないながらもあり、セッションを超えて登壇者間や基調講演者との間のインタラクションは盛んになされ、あっという間に時間が過ぎ、刺激的な余韻を残した。対面形式であれば、参加者全体での交流ももっと深まったかもしれないが、オンラインでのメタ・シンポジウムも、ある程度の成功を見たと言えよう。

さいごに

今回の交流会で繰り返し出てきたキーワードとしては、もちろん「身」が最多であろうが、それ以外にも共

通する言葉がいくつもあった。あえて分類的にまとめると、個人レベルでは、たとえば「体験」「一人称」「気づき」「身体感覚」「マインドフルネス」「意識」「無意識」「ことば」「感じる」「動く」「心身相関」、集団・社会レベルでは「つながり」「コンパッション」「社会」「環境」「ケア」、また全体・統合的なレベルでは「非二元性」「一如」「システム」「プロセス」「あるがまま」「気」「スピリチュアリティ」「魂」「いのち」などであった。私個人としては、これらに通底する主題、あるいはこれらが指し示す方向性は「平和な世界観」ではないかと考えている。それは単に戦争のない世界という意味ではなく、もっと能動的に実現される状態をイメージしているが、ここではこれ以上立ち入らないものとし、別の機会にまとめたい。

閉会後に、登壇者の方々からも、とても興味深かった、自由なディスカッションを楽しめた、美しい流れだった、もっと話を聴きたいなど、それこそ身に余る多くのお褒めの言葉をいただいたことは、企画者冥利に尽きることである。盛会の内に交流会を終えることができたのは、一重に登壇者と参加者全員のご協力の賜物である。本交流会の準備から当日の参加、また本誌の刊行に携わるすべての方に、心より、否、〈身〉より厚く御礼申し上げます。

文 献

- 深尾 篤嗣 (2015). 〈身〉の医療—心身医学から魂身医学へ— ratik
- 深尾 篤嗣・村川 治彦・岸原 千雅子・富士見ユキオ・中井吉英 (2021). 「身心医学」の可能性 心身医学, 61 (6), 507–515.
- Hanley, A. W., Nakamura, Y., & Garland, E. L. (2018). The Nondual Awareness Dimensional Assessment (NADA): New tools to assess nondual traits and states of consciousness occurring within and beyond the context of meditation. *Psychological Assessment*, 30 (12), 1625–1639.
- Harper, D. (2025). *Online Etymology Dictionary*. Retrieved from <http://www.etymonline.com>
- 市川 浩 (1984). 〈身〉の構造—身体論を超えて— 青土社
- 池見 西次郎 (2009). 東西の心身医学の統合 久保 千春 (編) 心身医学標準テキスト (第3版) (pp. 14–20) 医学書院
- Kauffman, S. A. (1995). *At home in the universe: The search for laws of self-organization and complexity*. Oxford University Press. (カウフマン, S. A. 米沢 富美子 (監訳) (1999). 自己組織化と進化の論理—宇宙を貫く複雑系の法則— 日本経済新聞社)
- Mahoney, M. J. (2003). *Constructive psychotherapy: A practical guide*. Guilford Press.
- Mahoney, M. J., & Moes, A. J. (1997). Complexity and psychotherapy: Promising dialogues and practical issues. In F. Masterpasqua & P. A. Perna (Eds.), *The psychological meaning of chaos: Translating theory into practice* (pp. 177–198). American Psychological Association.
- Prigogine, I. (1998). 基調講演 日本総合研究所 (編) 生命論パラダイムの時代 (pp. 131–169) 第三文明社
- Prigogine, I., & Stengers, I. (1984). *Order out of chaos: Man's new dialogue with nature*. New York: Bantam Books. (プリゴジン, I. ・スタンジェール, I. 伏見 康治・伏見 譲・松枝 秀明 (訳) (1987). 混沌からの秩序 みすず書房)
- 菅村 玄二 (2007). 単純系から複雑系の心理療法へ—精神分析, 認知行動療法, クライアント中心療法, そして構成主義心理療法— 三輪敬之・鈴木 平 (編) 身体性・コミュニケーション・こころ (pp. 1–75) 早稲田大学複雑系高等学術研究所 (編) 複雑系叢書 第2巻 共立出版
- 菅村 玄二 (2016). 〈身〉と気づきの関係を考える—現代の心身論の臨床的課題— 〈身〉の医療, 2, 28–39.
- Whitney, W. D. (1904). *The century dictionary and cyclopedia: A work of universal reference in all departments of knowledge, with a New Atlas of the World*. (Vol. 7). Century Company.
- World Health Organization (2023). Statement on the fifteenth meeting of the International Health Regulations (2005) Emergency Committee regarding the coronavirus disease (COVID-19) pandemic. Retrieved from <https://www.who.int/europe/news-room>

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

